

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12604

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590129

研究課題名(和文) 日本版スクールソーシャルワーク実践スタンダードの開発的研究

研究課題名(英文) Development of the Standards for School Social Work Practice in Japan

研究代表者

馬場 幸子 (Bamba, Sachiko)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：60646818

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：(1)米国のSSWrらにとって「スタンダード」がどのような意味を持ち、どのようにスタンダードが用いられているのかを調べる、(2)米国のスタンダードを日本語に翻訳したうえで、日本のSSWrらから、米国のスタンダードの内容と、日本のSSW実践との関連性や、日本でのスタンダードの必要性に関する意識を問う、(3)学習会を実施し、「日本版スタンダード」に含むべき項目や具体的内容についてのSSWrらの考えを聴取するという段階を経て、「日本版SSW実践スタンダード」(試用版)を完成させた。
この間、米国の「スタンダード」等を翻訳した冊子を作成、10回以上にわたる学習会を実施した。

研究成果の概要(英文)：We developed a Japanese version of the "Standards for School Social Work Practice" in the following steps:

(1) Investigation of school social workers' understanding and utilization of "Standards" in the U.S., (2) Study on the Japanese school social workers' views toward American "Standards for School Social Work Practice" as well as needs for "Standards" in Japan, and (3) Conducting study groups on "Standards" to ask Japanese school social workers their ideas about possible components of the Japanese version of the "Standards."
In this process, we created a translation booklet of "Standards," and had study groups more than 10 times.

研究分野：スクールソーシャルワーク

キーワード：スクールソーシャルワーク 実践スタンダード 評価枠組み

1. 研究開始当初の背景

米国では、1976年に全米ソーシャルワーカー協会(NASW)が「スクールソーシャルワークサービスに関するスタンダード」を作成した。2012年にはその最新版(倫理と価値、資格、アセスメント、評価、記録管理、現任研修、アドボカシーなど11項目からなる)が発行され、スクールソーシャルワーカー(以下、SSWr)に包括的な指針を与えている。また、関連する研究論文も多数発行されており、スクールソーシャルワーク(以下、SSW)に関する政策に反映されている。加えて、NASWのスタンダードを基準にし、各州、市でも独自のスタンダードを策定して、SSWrによる援助実践の展開を促進している。

一方日本では、全国のSSWrが共通に満たすべき基準を包括的に示したものは存在しない。1999年に日本スクールソーシャルワーク協会、2006年に日本学校ソーシャルワーク学会が設立され、それぞれ研修事業などを展開するとともに、入門書等を刊行している。また、2009年には日本社会福祉士養成校協会がスクール(学校)ソーシャルワーク教育課程認定事業を創設した。しかし、多くの自治体ではソーシャルワークの専門的知識・技術を持たない者がSSWrとして採用され活動しているのが実態であった。

2. 研究の目的

本研究は「日本版スクールソーシャルワーク実践スタンダード」の開発を目的とし、目的達成のため、以下の4つの段階を踏んだ。

(1)米国のSSWrにとってNASWのスタンダードがどのような意味を持ち、どのようにスタンダードが用いられているのかを知る。

(2)米国のスタンダードを日本語に翻訳した上で、日本のSSWrから、米国のスタンダードの内容と、日本のSSW実践との関連性や、日本でのスタンダードの必要性に関する意識を問う。

(3)学習会を実施し、「日本版スタンダード」に含むべき項目や具体的内容についてのSSWrらの考えを聴取する。

(4)(3)で得た内容を基に「日本版SSW実践スタンダード」を完成させる。

3. 研究の方法

(1)米国におけるSSW実践スタンダードのとらえ方に関する研究

質問紙調査

実施時期：2014年3月

実施場所：全米スクールソーシャルワーク協会(SSWAA)の年次大会(シカゴ)にて

質問内容：NASWスタンダードの認知、使用頻度や活用法、スタンダードの重要性に関する考えなど。

回答者数：165人。

グループインタビュー

実施時期、実施場所はと同じ。

質問内容：スタンダードの活用法や重要性についての考えなど。

参加者数：SSWr(スーパーバイザーを含む)5名。

(2)日本のSSWrに対する、SSW実践スタンダードおよびスタンダードに基づく評価に関する意識調査

質問紙調査

実施時期：2014年10月～2015年1月

実施場所：東京都心、大阪、東京市部の3会場での学習会にて

質問内容：NASWのスタンダード11項目それぞれについて、a.日本での実践と関連していると思うか、b.実践で重要視しているか、c.実践における弱点となっているか、d.日本版スタンダードに取り入れるべきか。また、e.日本版スタンダードを作成するメリット及びデメリット、f.スタンダードに基づいて実践評価を行うことについてなど。

小グループでのディスカッション

実施時期、実施場所はと同じ。

質問内容：a.日本版スタンダードを作成するならば、どんな項目をなぜ含むべきか、b.日本版スタンダードを作成するとしたら、何が気になりか。

学習会参加者合計：87名

アンケート回答者合計：81名

(3)日本版SSW実践スタンダード作成のための意見聴取

実施時期：2015年3月～2016年10月

実施場所：東京学芸大学内で実施した10回の学習会にて

実施方法：NASWのスタンダードの各項目を学ぶ学習会を実施、毎回、講義・実践報告の後に行う小グループに分かれてのディスカッションの記録を回収した。

学習会参加者：延べ約270名。

ディスカッション参加者：延べ188人

質問内容：日本版のスタンダードに入れるべき文章についてなど。

(4)「日本版SSW実践スタンダード」の作成

実施時期：2016年10月～2017年1月

実施方法：NASWのスタンダード、学習会資料、ディスカッション記録などを用い、「SSW実践スタンダード」(試用版)を作成した。文章作成は、学習会に継続的にかかわってきた協力者(SSWr1名)とともに行った。原案へのコメントを名古屋での学習会参加者から受けた。完成前にはSSWの知識を持たない研究者からもコメントを受けて、文章に修正を加えた。

4. 研究成果

(1)米国におけるSSW実践スタンダードのと

らえ方

スタンダードは米国において SSWr の専門性を担保するうえで不可欠であり、存在が当然視されていることが分かった。

結果抜粋

<スタンダードは仕事の道筋を示し、自らの仕事を正当化するものである>

「仕事の道筋をつける道具が必要だから、スタンダードは重要だ。」「スタンダードは自分たちが専門職であることを正当化 (legitimize) する。」「スタンダードがあることで、自らの仕事を正当化 (justify) できる。・・・また、業務詳細に書かれている目標を達成していることを証明できる。」

<スタンダードに沿った仕事をするように心がけている>

「スタンダードから外れたことはしないようにしている。・・・いつも実践スタンダードに立ち戻って考えている。」「スタンダードに沿わないことを行って自分たちをすり減らすようなことはしたくない。」

<スタンダードは、各 SSWr に内在化されている>

SSW 実践は「車を運転するようなもの」であり、既に「内在化」しているから自分は「必ずしもスタンダードについて考えはしない。」だが、実習生はまだ「職業を内在するには至っていない」から、「教材として、実習生がスタンダードをすぐに見られるようにしておくことがとても重要である。」

<スタンダードに基づいて評価がなされる>

「専門職としてのスタンダードを満たしているかについて評価を受ける」「(スーパーバイザー)は、SSWr が(ガイドラインに沿って仕事をしているかどうかという)情報を評価に用いる」

<仕事の証拠、生産性、価値を証明する形でスタンダードが存在する>

「良いことの一つは、自分たち自身の(仕事について)証拠を生み出すことができるような方法でスタンダードが作られたということだ。」「スタンダードは生産性に関するベースラインを示しており、評価を受ける際に生産性を証明できる。」「学校システムの中で、SSWr が自らの価値を示すことができる。」

<既に価値を置いているものが自然とスタンダードとなる>

スタンダードは第三者から押し付けられたものではなく、「自分たちが既に価値を置いているものから構成されて」おり、「自然と自分たちで作ったものだ。」「日本に帰ったら、ほかの人が何をしているか、何がうまくいっているかを見たらいい。それが自然と日本でのスタンダードになる。」

<スタンダードがプロフェッショナルリズムを支える>

「最も高いレベルのプロフェッショナルリズムを示す必要がある。そうすることで、自分たちの声を聞いてもらえるし、彼らは我々の

意思決定を信じるのだ」「だからスタンダードは重要なんだ。」「(日本でスタンダードができたなら)それは SSWr に付加的なサポートを提供することになるだろう。」

(2)日本の SSWr の、SSW 実践スタンダードに関する意識

全体としてスタンダードに関する参加者の関心は高く、スタンダードができることにデメリットよりもメリットを多く見出していた。特に倫理と価値、アセスメントなど SSWr 固有の専門性を発揮するうえでの基準を明確にすることへの期待は高く、スタンダードの存在によって SSWr の役割を自他ともに認識しやすくなる、自治体での SSWr 活用につながる、自らの立場を守るのに役立つなどと考えている傾向があった。

ただし、懸念も多く語られた。スタンダードに頼って実践が形式化してしまうことへの不安や、スーパーバイザーや安定雇用などの条件が整わないままでスタンダードを導入することへの懸念、また、せっかく作っても浸透するのか、自治体が対応できるのかなどの心配も語られた。

結果抜粋

NASW スタンダードの日本の実践との関連性が高いと思う項目

倫理と価値(85%)、アセスメント(80%)、専門性の開発・向上(75%)、アドボカシー(75%)、記録の管理(67%)など。

実践で重視している項目

価値と倫理(88%)、アセスメント(84%)、専門性の開発・向上(81%)、アドボカシー(69%)、記録の管理(67%)など。

スタンダードができることでのメリット SSWr の専門性に対する自らの認識が高まる(68%)、自らの SSW 実践における課題がとらえやすくなる(63%)、迷いや葛藤が生じたときに読み返し、立ち戻るべき拠り所を得ることが出来る(58%)など。

(3)日本の SSWr の、SSW 実践スタンダードに基づく評価に関する意識

自らを振り返り、課題を改善させるきっかけができるという点で自己評価を行うことに意義を見出した参加者が多かった。一方で、自治体や学校管理職から評価を受けることについての抵抗感も多く表明された。

結果抜粋

自己評価の結果

「計画と準備」6項目中3項目、「専門職としての責任」5項目中4項目で、「できている」「よくできている」の合計が回答者の半数を上回った。特に「協力的で専門性のある関係を築く」「家族の関与をアセスメントする」の2項目で「できている」「よくできている」とした回答者が多かった。しかし、全20項目中11項目において回答者の半数以上が「あまりできていない」「全くできていない」と回答していた。

自己評価を行った感想(自由記述)
「知識不足を感じた」「モニタリングや記録についての弱さを改めて感じました」「マクロな視点が不十分であることを再確認できた」など。

評価枠組みについて

「自分を見直すのによい」「自分で評価するのはいい」「自分を振り返るだけでなく、ワーカーを取り巻く環境(全体像)をつかむツールとなれば」「ワーカー同士で評価を用いて互いの活動を知ることにもつなげられれば」「評価者とSSWrとが一緒に確認できる点はよい」など。

他者から評価を受けることについて

<適切に評価がなされるのか> <評価の結果どうなるのか> などについての懸念(例: 「本当にきちんと評価ができるのだろうか。もし学校長が評価者であれば、できないと思う」「どんなにいい評価がでて、次年度の雇用につながらなかつたら無駄におわる」)。<評価を行うのであれば、体制の整備が不可欠>(例: 「誰かが評価してくれるのであれば、スーパーバイズの立場で十分に指導を受けられるような環境が必要」)。

(4)日本版SSW実践スタンダード作成へ向けてのSSWrからの意見

毎回の学習会において、小グループに分かれてディスカッションを行った結果、各項目について多くの意見が出された。

結果抜粋

専門性の開発・向上

「知識と技術の向上(=研修を続けていくこと)は重要。」「情報を集められる他機関との関係づくり」「継続的にスーパービジョン:どのように持続させていくのか。スーパーバイザー資格を統一させていく必要」

倫理と価値

「教員や他職種出身でも社会福祉士の倫理綱領に基づくべきではないか」「自治体や教育委員会は理解すべき」「秘密保持:個人情報保護法」「判断に迷った時に立ち戻れるシンプルな言葉が欲しい」「社会福祉士の倫理綱領、精神保健福祉士の倫理綱領+子どもの権利条約」

アセスメント

「何のためにアセスメントするのかを明らかにする」「本文も解釈もわかりやすい言葉で」「包括的なアセスメント」「協力体制のためのアセスメント」「学習成果を向上 学校生活の質を向上」

記録の管理

「支援の計画、実施評価だけでなく、アセスメントも必要」「個人情報保護や守秘義務に基づく保管」「記録の定義が必要では」

多職種の関わる学際的リーダーシップと連携

「リーダーシップ 推進的役割」「肯定的な校風 開かれた学校」「リーダーシップという用語がしっくりこない」「SSWrは子どもの

最善の利益を目指す」

意思決定と実践評価

「意思決定という用語にやや疑問がある」「『評価』が引っ掛かる。『実践のふりかえり』あたりが受け入れられやすい」「日本では、データを収集するところからスタート」

アドボカシー(権利擁護)

「全児童生徒とはどの範囲か」「学力向上だけが問題ではない」「成長を支える」「子どもの意見表明」「ユニセフによる4区分を入れる」「学力向上 学ぶ権利」

介入

「『介入』という言葉が分かりづらい。定義が必要。」「SSWrの介入の根拠を法律で規定してほしい」「『エビデンス情報』がわかりにくい」

仕事量の管理

「SSWrの仕事量の管理システムを作り、SSWrは各自の仕事量を管理、調整する」「学校区教育委員会」「質を担保出来る範囲」「必要な支援をレベル的にとらえ、管理にはIT機器が必要」

資格・資質

「資格よりも学び続けることが重要」「自分がどう研鑽していくか、アイデンティティをどう持つかは重要」「社会福祉の資格を持っていない人がSSWrとなっていることは問題。法定化すべき」「学校文化の理解が必要」

文化的適応

「親の文化を尊重しつつも、いま日本で生きている子どもを支援する視点」「日本の文化の価値観で見ない」

(5)日本版SSW実践スタンダード(試用版)の作成

(4)までの過程で得た様々な情報を基に、日本版スタンダードの作成を行った。

検討・考慮した事柄の抜粋

「倫理と価値」「権利擁護」は最重要事項として初めに持ってくる。

「文化的適応(cultural competence)」の概念や「文化」を「外国の文化」などと狭義にとらえられないように、「多様性の尊重」とし、地域性や個人や家族の特性などにも言及する。

「リーダーシップ」の用語が、本来意図しているのとは異なる意味でとらえられる可能性があるため、「専門性の発揮」とする。

「アセスメント」「エコロジカル視点」「ストレングス」「データ」「意思決定」「実践評価」「コンサルテーション」など、分かりにくい用語には説明分を加える。

NASWのスタンダードの“Qualification”の項目は、日本版では、「資格・資質」とし、「資質」として学校理解を強調する。

NASWのスタンダードの“Record Management”は、「記録の管理」ではなく「記録」とし、作成すべき記録の種類や記録の書き方、保管方法まで網羅的に言及する。

読みやすいように、「だ」「である」調では

なく、「です」「ます」調にする。

学習会を始めた当初、スタンダードで実践内容を規定されることや、自治体担当者から評価を受けることに対する懸念が表明されたことを踏まえ、日本版スタンダードの冒頭(「はじめに」)に、スタンダード活用の際の留意点を丁寧に記述する。

(6)日本版 SSW 実践スタンダード(試用版)の完成

13項目からなる「スクールソーシャルワーク実践スタンダード(試用版)」を完成させた。作成した冊子には、「スクールソーシャルワーク実践スタンダードに基づく評価票」も付けた。

Standard 1:倫理と価値

Standard 2:権利擁護

Standard 3:多様性の尊重

Standard 4:専門性の発揮

Standard 5:アセスメント

Standard 6:支援の計画と実施

Standard 7:連携

Standard 8:コンサルテーション

Standard 9:意思決定と実践評価

Standard 10:資格・資質

Standard 11:専門性の向上

Standard 12:記録

Standard 13:仕事量の管理

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計3件)

BAMBA, Sachiko. "Perceptions on the Standards for School Social Work Services in the U.S. and Japan: Toward the development of the standards in Japan." 19th National School Social Work Conference presented by School Social Work Association of America. (Baltimore, MD, U.S.A.) 2016年3月9日

馬場幸子 望月彰 金澤ますみ 鈴木庸裕 「日本版スクールソーシャルワーク実践スタンダード作成への試み：米国のスタンダードの日本への応用についての意識調査」日本学校ソーシャルワーク学会 第10回記念大会 福岡国際会議場 (福岡県・福岡市) 2015年7月5日

馬場幸子 「米国におけるSSW実践スタンダードのとらえ方：スクールソーシャルワーカーへのグループインタビューより」日本子ども家庭福祉学会 第16回全国大会 関西学院大学(兵庫県・西宮市) 2015年6月7日

〔その他〕

冊子の掲載：『スクールソーシャルワーク実践スタンダード(試用版)～スクールソーシャルワーカーのあるべき姿とは～』のHP

への掲載 (東京学芸大学パッケージ型支援プロジェクト)

<http://ccss.tokyo/archives/category/report> 2016年3月～

冊子：『スクールソーシャルワーク実践スタンダード(試用版)～スクールソーシャルワーカーのあるべき姿とは～』完成 2016年3月

研究成果報告書：『日本版スクールソーシャルワーク実践スタンダードの開発的研究 - 学習会と学会発表の記録 - 』2016年2月

学習会のHP (SSW 関東学習会)

<http://educare.web.fc2.com/standard.html> 2015年2月～

冊子：『NASW Standards for School Social Work Services (2012) SSWAA School Social Work Practice Model Overview (2013) SSWAA National Evaluation Framework for School Social Work Practice (2013) 翻訳小冊子』2014年11月

6. 研究組織

(1)研究代表者

馬場 幸子 (BAMBA, Sachiko)
東京学芸大学・教育学部・准教授
研究者番号：60646818

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

望月 彰 (MOCHIZUKI, Akira)
愛知県立大学・教育福祉学部・教授
研究者番号：40190954

鈴木 庸裕 (SUZUKI, Nobuhiro)
福島大学・人間発達文化学類・教授
研究者番号：70226538

門田 光司 (KADOTA, Koji)
久留米大学・文学部・教授
研究者番号：50269081

澁谷 昌史 (SHIBUYA, Masashi)
関東学院大学・文学部・教授
研究者番号：80460145

金澤 ますみ (KANAZAWA, Masumi)
桃山学院大学・人間科学部・准教授
研究者番号：80581058